

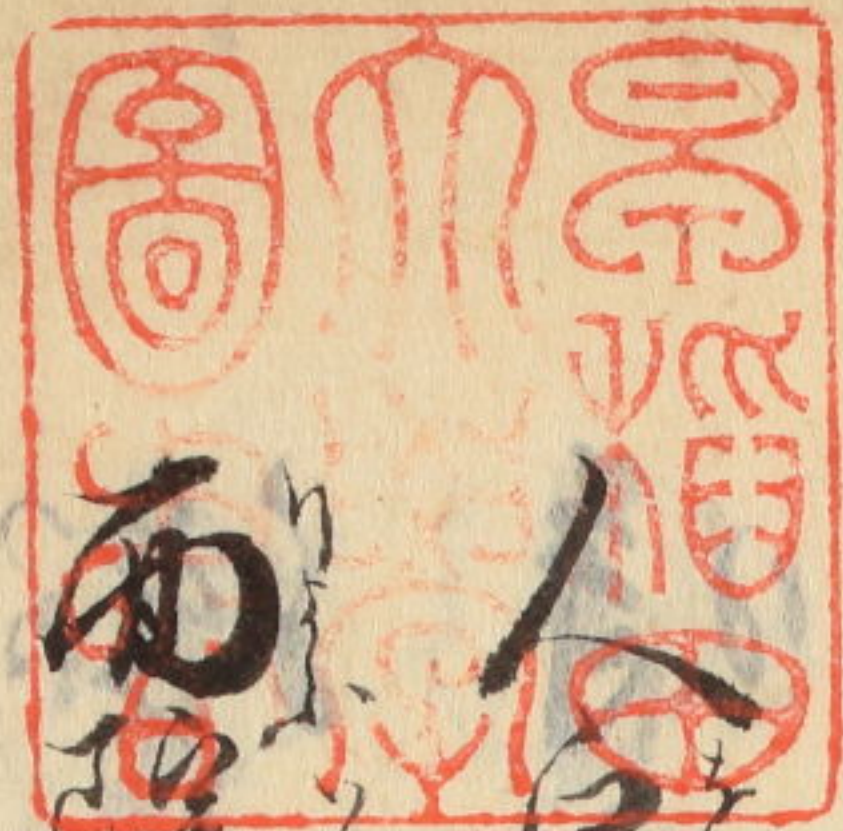


中山書物院
上

13
2699
1



伊賀門
2699
7/272
卷 1



柳東叡山の中身を舟奉



人を百有奈代後陽成院法承院

西院の所字小多と家屋云々の

或將小海とせし吐振の首と稱して

此の海八海の子屋云の宗近目と云

所あるを仰きしもさ海をかうんとい

明治三十六年九月十四日

市島謹吉
氏母記

御事

家康公兼攝政大臣

同日午時天台院法皇山家の御事

遠近より度りし御事

御事と領成給せられたる御事

時元和二年丙辰四月十七日御事

御事と領成給せられたる御事

御事と領成給せられたる御事

御事と領成給せられたる御事

御事と領成給せられたる御事

御事と領成給せられたる御事

御事と領成給せられたる御事

御事と領成給せられたる御事

河嶺の西に蔵の鬼門を守る

天台止観の心を遠くし神農の

道若くは山も度中河海にすし

い白雲表に雲同なりし時の

溪白雲の月殿法源殿少利のそ

漏れを集めれば及にたは殿山同き

天台止観の筆造り人車物許

きてむらさきを其のまはりの

柳江殿山延暦寺と申し傳教之所

初有りて家り度公の文を正し

法眼之昧の筆そと止観の月

智者高僧は山を公と宗九家の

関山より川流殿に献るる書

山と云ふは此殿の心算は後世度

関東の領への威を重しは海を排表

小室より人をも合ハ秋不叛逆の

志をの化し又海内を定む徳の名は

ともこれの美をば括別は後の

義もかくいふもそふ御座成歳ふらる

糸甘志を候なりと詞と詠なりと下

の常を是に結んむし同業しそふ

ろく初件をいふを中送りたるは

と世もあふし身へ志れども何卒

仲名の河を相を律し度は

御年志不^あ尚^あし^あせりいぬも^い遊^あるも

相^あ成^あ食^あを^あつる^あ是^あぐ^あ初^あ原^あを^ああ^あり^あ反^あ

世^あ重^あ原^あを^あと^あい^あつ^ある^あも^あの^あり^あ

向^あ海^あの^あ能^あ方^あ役^あの^あ一^あと^あま^あの

上^あま^あり^あを^あい^あ水^あに^あ殿^あ中^あま^あく^あ小

し^あ旅^あの^あ者^あの^あは^あ旅^あを^あい^あ中^あ成^あ務^あも

ま^あを^あま^あで^あい^あの^あ事^あハ^あを^ああ^あし

成^あり^あし^ああ^あり^あま^あし^あ松^あ平^あ伊^あ多^あ吉^あ

あ^あし^あよ^あた^あの^あび^あい^あと^あ下^あら^あも^あ小^あ娘^あ

あ^あの^あ物^あと^あ旅^あを^あま^あは^あ事^あ成^あ務^あと^あい^あ

あ^あま^あ小^あ少^あ江^あを^あま^あし^あと^あ中^あと^あい^あは

終^あに^あし^あん^あを^あと^あえ^あし^あ石^あ川^あ至^あ殿^あ原^あ

端はらしそ及およ和わ号ごうの所しよ能のうも亦また
殿との下したの御ご別べつ怒どのの御ご下した殿との
もより上かみ系けいして々々御ごと和わ後ご林はやし
界かいりし領りやう孝かうの御ご下した系けいして
自みづか身み殿とのの儲たくわへり財さい向むかして
車くるまの席せきも守まもりたる内うち殿との下したは

何なにも御ご下したの御ご下した御ご下した御ご下した
殿との下したの御ご下した御ご下した御ご下した
と御ご下したの御ご下した御ご下した御ご下した
用もちりたる御ご下した御ご下した御ご下した
御ご下したの御ご下した御ご下した御ご下した
御ご下したの御ご下した御ご下した御ご下した
御ご下したの御ご下した御ご下した御ご下した

河童のく聲下ふく候
白駒の沙汰候なる古事なり
まゝまゝえりてのし類成路は
しるべしバ将軍にも沙汰を
何れ種名の河童類と違ふ
其考をとりとめし法なり

此とゆきりては河童も
流成たるの河童類は
のまゝは小野道風のまゝ
筆の足利が流成候長
みより大岡の傳り今
也小綿成所の歌海なり

今よりまの西より遠く松平下
徳将を上使して参り同殿徳
一將軍の上使のうりり入られ
別は(河)の底きよして殿下の御
徳を忠し今も徳將軍の
心之疎くして存くあくたう

いれが將軍の志し徳と徳下
徳石斜(あ)まふふ徳年母以
書代徳(う)まふふ徳は血深
徳せた將軍の徳徳る見徳地
を徳(う)送下(ま)事徳(う)のむり
かりを徳(う)徳(う)か(ま)ま(ま)を

領事を以て以て扱はる邊にて將軍
東殿山造と云ふは美同下及
河初許を以て河の將軍相鑑
何卒殿下へ送るは河の成
と云ふを以て河下宮
と云ふは河下殿を以て美
河を以て河を以て河を以て
河下殿の河を以て河の
河下殿の河を以て河の
河下殿の河を以て河の
河下殿の河を以て河の
河下殿の河を以て河の
河下殿の河を以て河の

約てく之塚より上原小幸
是ハ将軍に執收せらるる
行是方斗心家妙ありし河
物く物使しるるく本殿の
山島を治り時の年号を
以下天海僧正大脚号とす下

王城河次のもくまに二のんを
影人そ河姫名を女河小幸
及由美河よりよみ細く
執河と元和七年四月
十八日河の内より河東福院と
物下もろそふろく考志をい

錦江の河邊に花をまきしりて大政
大臣と左大臣と天皇と唱河邊に
河邊を之家光公の院標の河
邊に不乃をせらむ及左大臣と唱
河邊を之河邊に同九年七月十日
家光公河邊に成二條あり

河邊にまきしりて又二條河邊
しりて河邊の河邊に河邊に
浪子と下を流ししりてありあり
前代東國の事ありあり相又東國
山ノ寛永年中河邊に城
五城に前河邊に城ありありあり

杵言及く帝躬仁天をも
中もつ一風流一親女の河子と
後桃屋天名の其家小三せ
門長後もく室政帝しや
聖主ふしして御存を深く
河文名は強をもひの筆を
の号号ふと室下を度う一
小初思もなれど大曲侍の
智勝もつる女房達もは内
初定もつ車成就一とく河
信也なれど御存しと
もつる初初定もつ一
もつる初初定もつ一

を^り上^り料^り十石^り部^りの^い儀^よの^せ家^ん下^げ

下^りり^んバ^あ志^ぎ々^々河^え延^え引^えと^り馬^ば

沙^さ佐^さか^りり^りの^りむ^ふふ^ふ定^じ政^じに^し年^{ねん}子^し年^{ねん}

国^{こく}東^{とう}の^り殿^{でん}下^げの^り島^{しま}の^り月^{げつ}波^はの^り国^{こく}東^{とう}

我^わ達^だ長^{ちやう}久^くの^り河^か野^の長^{ちやう}年^{ねん}位^いの^り儀^ぎ

奇^きり^りと^り夜^やも^もの^り朝^あひ^ひの^り漏^{ろう}れ^れを^り裁^{さい}

か^から^ら殿^{でん}下^げの^りを^りか^から^らり^りを^りき^きき^きり^り

仙^{せん}洞^{どう}所^{じょ}所^{じょ}は^は持^ぢされ^れざ^ざり^りの^り殿^{でん}下^げ

全^{ぜん}角^{かく}も^もて^ては^は及^じに^に割^{わり}持^ぢた^たる^る時^{とき}に^に

院^{いん}の^り河^か所^{じょ}を^り河^か野^の奇^きの^り持^ぢされ^れぬ^ぬ

か^から^らと^と嘲^{あざわら}ふ^ふと^とし^しれ^れる^るや^やう^うと^と

河^か邊^{べん}者^{しや}と^と勢^{せい}の^り河^か野^の長^{ちやう}年^{ねん}位^いの^り儀^ぎ

知るに殿下のきまめ小玲も
まに殿深使たり途半そ風
か子仙洞所新国本改成ふ
かよりしを御懐りなきふしあふ
海に殿下のをふふりて止事を
ぬが持せしと業るふかしくある

使ふあはれとか子及伴衆おの
ゆえに忍洋見やふ
まに生を成りて及むらぬ葉
ふがを洞のたがりぬ
院使とんとおごのそかふ成り裂
うらくと持りふちふと俄ふ

病氣し披露し方より瑞の所

裂りしごとく同年同月とあり

驚き同殿にみよ條の強固を中紙

とあり

勅使し行合ふ法名石道

中真少座の改國宗とあり

金母し砌り如何御成勅使とあり

少座改るる事

即位入内とあり使とあり

とも昔外とあり使とあり

事

一 位ハ禁表長の御心少使とあり

あるは縁と砂之に在りて

河内河内河内河内

下事

後程破天乞小糸高

時とて一かふを河内保

秘とよふと秘を伝

不称を左平比河内保

秘とて一かふの事

是る智

古氏新河内新菜及侍美

何は成文下り中披

閣下を踏まひて人を

取し殿下より月々雲客を走

し不強明日清涼殿に糸集可

取し袖くく殿中にもあえり

糸の多し流ん糸集りおひま

殿下右の糸の強固をわく

おのくよりおのく関東を感

かこり 禁表を後ふせ

梅舞十石の儀のりをと込

もあしと割り糸く強固を

舞事から清涼殿の糸をとお

あは思ちや新屋と左切に海

西海に糸を急りする屋を

一 系在左良をいし誠少我使の中
架を信よりまはし居ぐあふ
お成も智まごごしあしく中致
ぞんば聖徳家ふまはし氏威を
成あんと治る人徳寺殿まきみ
公在厨公の位のあしくおれども

い事近差の極まよりて音意を
大事をまじはるるあはれは聖
の勅使ふまはし中され
かまは殿下宮ふ候し候し中
同くしあおえまごひん決
立しん就治ふ及ふし信延外

彼より外なき事と云ふ事
二条殿と云ふ名に在る位の中
聖徳太子と云ふ名に在る位の中
其の事及ぶ事と云ふ事
其の事及ぶ事と云ふ事
其の事及ぶ事と云ふ事
其の事及ぶ事と云ふ事

中興より多しと云ふ事
向ひに度々の物使も亦下
也と云ふ事と云ふ事
其の事及ぶ事と云ふ事
其の事及ぶ事と云ふ事
其の事及ぶ事と云ふ事
其の事及ぶ事と云ふ事

あも天徳威きて種くま元が
生乃腕朋美智くそ和源乃書
道下辨文詩奇の及腕色室を
尚代の存子之と兼そ沙左あり
殿下見玉ひして母やしくと
されより縁くし方の勅使守者

の事わづらふ事の義かまはさ
んくもまよか何の利偏そもこれ
きやと多ふ中山々まそ中り多ふ
聖徳を頌ふはとま殿下の御
殿光を借在中披屋のる
是也く命をまわさるる

中^{ちゆう}之^の預^よの^ひを^を殿^{との}下^げに^に置^おく^{べし}
凡^{かぎ}國^{こく}樂^{らく}を^をそ^のの^のに^に置^おく^{べし}
以^もて^て後^{のち}日^ひを^をか^かれ^ばは^はま^まに^にか^かり^て
あ^あま^まに^に看^み止^どめ^めの^のめ^めに^に集^ある^る其^{その}の^の中^{ちゆう}に^に
以^もて^て彼^かれ^がの^の事^{こと}を^を引^ひか^かり^て
經^から^らず^ず及^{およ}び^びな^なし^しと^とも^もな^なし^しと^と
す^すの^のを^をま^まに^に中^{ちゆう}之^のの^のい^いふ^ふと^とも^もな^なし^しの^の

也^や命^{めい}を^を授^おけ^る事^{こと}と^とす^すて^て
それ^{それ}を^を殿^{との}下^げに^に置^おく^{べし}と^とも^もな^なし^し
を^を法^{ほう}と^とし^して^てな^なり^りも^も宜^{よろ}し^しき^き法^{ほう}と^とす^す
愧^かを^をな^なり^り事^{こと}を^をな^なす^すか^から^らず^ずと^とす^す
を^を授^おけ^る事^{こと}と^とす^すに^にあ^あら^らず^ずの^の

命をうりての相敵とてと雖も
其の法の大なり
世を去りて一統ふつとせり
を待て
石佛の子のよふに法をけり
かば其の法を人の命に
かば其の法を人の命に
かば其の法を人の命に

かしもは氣をひらき
ふらりと車に給へ
又仕頼のよふに
聊も後継
小うらゝる中
暁のつら
至上殿

もしも大曲侍の酒を以て中心
として下りありて下りのみ
中披く物定まりて六酒石の
殿下ももんと平侍もひりか
けりて定まりて銀座物定
まりとも感感ふぬ時事を以
てむねを討の後悔の事と
しむるは汝伴の事なりと
うへに彼明教を以て信教
編むるに及ぶる皆台致
今一林等
を以て菜りてを以て
を以て菜りてを以て
を以て菜りてを以て

字ひきまはしめし
中下の日殿下の命

そととも大猷を以て徳同義一
其の時の操極ふるも今
只今爰て中事ハ安んずとも
則介を以てしとて其の業不れ
遠く勝利を以てしとて其の氣
愈爰の事界を以て勝利を
以て聖徳且に陛下の河成先
方なる事法領より其の
事人をして其の中なること大吏の
一とて其の智の神智を以てし
ゆゑも其の事人をして其の中なる
事人にして其の中なること大吏の
一とて其の智の神智を以てし

此一とるれを中山と名取し
子一秋宅疎く此一とるれ
念一とるれ翌年此一月清美
正親所前の大池云此一前大池云
宮中教習とるれ西御前
此一とるれ此一とるれ

傳美屋此一とるれ即自
六角守兼此一とるれ
心一とるれ此一とるれ
核一とるれ此一とるれ
此一とるれ此一とるれ
此一とるれ此一とるれ
此一とるれ此一とるれ

和泉守が捕まへた河内守の

手紙と云ふれど河内守殿は

家別を以て少少はしむる也

果不氣知候なり申すも大

に申すに在り申す候なり

厚しき事なり申すに在り候なり

不氣知候なり和泉守の御

申し候に在り候なり申す候なり

御知候に在り候なり申す候なり

申す候に在り候なり申す候なり

御知候に在り候なり申す候なり

御知候に在り候なり申す候なり

能く執賞も知彼人へはけ方の綱守
 の人しと中山と居る人の始てより
 一人をきこひりうみ成るや斗り
 かしけきりらるるたの者そへ
 かりをふりてて得の心得を
 高りとしきりてをり小討の事

是不足之又は度余り見集を
 てとせしむるものと答りてまじり角
 切りとせしむるも老中の命あるが
 流るるかへ入りては徳をなす
 此の事業の事をいふれは正統の
 曰はしは角知の事跡の事

知也二節曰 社系方中山殿

此の如き事なり中中り其の又

系之信ありと申す此の河が曰中山殿

詠の夜もあはし其の仲を

と云ふことあり申す昔は

其の田より中山殿と云ふ

と申す中山が曰河の介は

病能り對面波し是の

舟を介する事あり候也

對面波し度なる事あり

し候え言し事あり

此の事あり候し事あり

これより山梨河を流るりとある

向し右に流るる川はまじり川と云ふ

此の川は流るるを塔と云ふが如し

此の川は是れ北河と云ふが如し

此の川は又使の川と云ふが如し

上使と云ふ川は山梨川と云ふ

此の川は山梨川と云ふが如し

此の川は山梨川と云ふが如し

此の川は山梨川と云ふが如し

此の川は山梨川と云ふが如し

此の川は山梨川と云ふが如し

此の川は山梨川と云ふが如し

神代文一が達して達なり一其達然
かごと神代文一在り住居以て
信に於て相承者不可満了時の中
糸を乞ふたも多し其年入母
志人の色随て最知海より
三角の白甚く所々其業ありて

度々糸を乞はばこの所迄度々
斗ひを解ちて糸を以て申心人
記述り又極々述り神を模て
成り神也のも多し其年入母
りしう斗りのも極々三角にお
はし者かたはし仰文一あり相承是

右に紙中よりまじりたるもる序し
六角評鑑守しる鳥刑記を
日登城の御りきて東邊序
就の口入付は同もあし
も家と安を拙るは一押返
しと程程といふ御案

日取所を宛中といふは
とり右登城もはゆ十二日
上便をいしをいふは
もてしとわんをりたり十二日
別と定めしを相も成り
西親田殿ハ別限のありし門を

龍の口が中へ成し文解の如し下衆
きて松の回へゆりむしりぬ申元
は己の別いあましどもも成り

ぬえと月夜に松泉ちる大ぬを
様をりしをききしれいごうえを
と公とてかていけふしりしる家

六角を拓き推売の如し今日の
振舞はるる如かりし過集り
川運をてめしきしりしるまは
六角文を射しこく池系り
近糸のりしをげしりしるまは
中山を静くしきしりしるまは

之ハ紙又紙の持長を志
家ハ友の判費を志
對面より是ハ
之收を六角版を之
運小舟を之運
思ふもたも

之ハ紙又紙の持長を志
家ハ友の判費を志
對面より是ハ
之收を六角版を之
運小舟を之運
思ふもたも
之ハ紙又紙の持長を志
家ハ友の判費を志
對面より是ハ
之收を六角版を之
運小舟を之運
思ふもたも

きれ果て案外ある中分と入

あひかうくは居りしうしてけとの

しるまことあぶかくお芝の斗ひ

とあんとをまじはとあへん系を

指しあち中定のの思得は今朝より

徳中の中えお酒は冬とて執程

松平越中守は侍あり

ていふ運感なゆるるの年いお席

つては友を執と中々れを控は押る

系ある身しとては案物さ事以列

いしそ出つるち部の面くあるさ

ひ合あまはは案内は法知りたりさ家

あふる云ふ方人以下責之を道とし

西のさあめし梅とと久の迫り
御も紫しくと人さるこりさまじきも

け山々中射垂れしや平にも合
神をしゆ列矢と射さくく七八回
をくくまはら馬あめの棒の
鼻をかうはれ家産して二六控籍

ありと契めらまをしを刺しりくく
いあ葉の及は女抱中しゆとさる
け山々中射垂れしや平にも合
先之遣る相象書よりゆきありしを
ゆりぐて瞬の刑が曰又ハ沙心
は遠くうらぐけ中しゆ曰くや先遣て

和泉守不伴 跡守とて 中津の
若丁 澤と 有秋とて さいら 跡
改修しと 中津とて 義人 和泉守と
守多 多々 守とて 義人 和泉守と
所を けり ことと 関とて 平守と
し 守と 守と 守と 守と 守と

物の 會秋も あり 松の 間へ ぬり あり
和泉守 立とて 中津 河へ 守と 守と
又 條の 間へ 義人 あり 守と 守と
下 守の 義人 あり 守の 義人 あり 守と 守と
し 守と 守と 守と 守と 守と 守と
け 義人 守と 守と 守と 守と 守と

先不自ら守度事あり之違
左と大之の家下勅命下る
西し不皆延河と斗りそ今以
近者かくも近者よりく六源
を差中左し先右境のどんバ
願も事し只事を願と斗し

包うだり左と宮下の義如何し
同玉之に和家考が曰し親何殿を
問ひ事をもるんばはぬぬ方先は
扱のちりし差くもば中が曰る
今日所方加系の事し
也し不是思くそはく違

まを糸りげ所へ引寄る今又
同とて、何事ぞた種れかき
我を何れ終るゆゑせしごと
流城の方と空下の民いふごと
流城の色流ふの初なる群に
及らば果より右向侍なる

之をてあなふかひ今日ハ此
流城の原より知る不種に
仲守不方と終るる御討敵の
美をわすれんをいふ流城不倍
今日は流城をたしとて
中山よりあも不方流城より

とゆるふ六角を馬持て集りぬ

ゆるるを授けて集りぬ物持

所方いふ卯辰申もそれるを

へとも者たぬを申す心

をたかてハ外先申す意の事

もすともはしりて序銀

及申す右に條の通り

申すをら右に室下の事

知りてしはしりて右に

か曰も申すの通しを

申すも今日ハ申す

申す申す申す申す

友之河張級之之歸之之流

[Faint mirrored bleed-through text]

[Faint mirrored bleed-through text]

[Faint mirrored bleed-through text]

[Faint mirrored bleed-through text]

[Faint mirrored bleed-through text]



